

花みづき

第33号 / 2019.4.1

白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL.042-346-5626

「未来につながる図書館」を 豊かに創造したい

白梅学園大学 白梅学園短期大学 学長
白梅学園大学・短期大学図書館 新館長
近藤 幹生



本学の図書館は、大学・短期大学・大学院に向けての図書館である。

皆さんに図書館の概要を紹介しながら、「未来につながる図書館」を共に創造することを呼びかけたい。本学の図書館は、保育・幼児教育の専門書をはじめとして、以下のような特徴をもっている。2018年3月末現在、蔵書数は169,246冊、(絵本11,389冊、紙芝居734点)であり、絵本・紙芝居の数が多い。利用者としては、白梅学園関係者(大学生・短大生・大学院生、教員、職員)、白梅幼稚園保護者・卒業生にも対応している。デジタル社会といわれるなかで、本学図書館のデータベース資料としては、小規模な図書館ではあるが、国立大学・総合大学並みに契約をしている。大げさではなく、本学図書館から、日本中や世界中に、知のネットワークが広がっているといえる。

さて、皆さんは大学の図書館を利用するというのを、どのようにイメージされているだろうか。授業において紹介される図書については、閲覧や貸し出しはもちろん可能である。日常的な新聞、月刊・週刊・季刊雑誌類なども、発行年月順に整備され、読みやすい環境が整えられている。映像資料も豊富に所有し視聴できるコーナーがある。本学では、専門職の免許・資格の取得をめざすために、実習に

向かう必要がある。実習への理論的な学びとともに実技的な準備のために、絵本や紙芝居などの活用が多いことも特徴である。そして、本学先生方が執筆されている図書、テキスト、論文などもわかりやすく書架にそろっており、是非、手にしていただきたい。日常の学習をはじめ、期末のテストやレポート作成において、調査をする学生たちの姿が良く見られる。学年がすすみ、短期大学ゼミナール研究発表会にむけた研究資料の作成、大学の白梅子ども学会に向けた卒業論文の作成に取り組む際も、文献検索や資料を開く機会が多くなるだろう。大学院生の場合には、修士論文・博士論文の執筆に向けて、より意識的な取り組みが必要になる。本学図書館では、子ども学関係の専門書をはじめ、論文検索、他大学からの文献資料を入手することも手続きにより可能である。さらに、白梅学園大学・短期大学学術リポジトリでは、博士論文、紀要、研究年報、なども公開されている。

以上は、特徴の部分的紹介になるが、白梅学園は、創立80周年をめざして、大学・短期大学の将来ビジョンを策定し、図書館のあるべき方向性を含めた検討が開始されている。少子高齢化社会、AI社会、グローバル化などといわれるなか、人と人との豊かなコミュニケーション、そして何

よりも視野を広げ、ゆっくと、深く、思考することが、求められているのではないだろうか。

いま、図書館の将来構想が練り上げられてきている。その中で、図書館が目指す大きな方向性(課題)として、①授業・教育、②建替え、③特徴・強み、④地域貢献の4つの柱が整理されてきた。全体の将来ビジョンにより、どの方向性を優先するかが明確化されていく。

授業・教育では、図書館における教育活動、利用者サービス・情報発信・学生・教職員への利用者サービスの向上、情報提供の充実化である。建替えでは、館内の環境整備・施設面(ハード)の充実・館内スペースの確保である。特徴・強みとしては、図書館の特徴・資料の蔵書数、収集方針の明確化である。地域貢献では、図書館の姿、対外的な関係・他所との連携強化等である。

今後、学生の皆さんにとってはもちろん、教員や職員、地域の方々にとっても魅力あふれる図書館にしていきたいと考えている。積極的な活用と図書館への要望や意見をお寄せいただきたい。毎日の学生生活を、より有意義にすすすために、気軽に、足を運んでほしい。皆さんとともに、「未来につながる図書館」を、豊かに創造していきたい。

近藤学長 近著一覧

- 『保育の自由』岩波新書、単著(2018年) ■『子どもと社会の未来を拓く保育内容総論 第3版』青踏社、編著(2018年)
- 『どう変わる?何が課題?現場の視点で新要領・指針を考えあう』ひとなる書房、共編著(2017年) ■『保育の哲学3』ななみ書房、共著(2017年)
- 『改訂版実践につなぐことばと保育』ひとなる書房、共著(2016年) ■『保育の哲学2』ななみ書房、共著(2016年)
- 『保育の哲学1』ななみ書房、共著(2015年) ■『保育とは何か』岩波新書、単著(2014年)

文庫本のお値打ち感

白梅学園大学 白梅学園短期大学 新副学長
子ども学部 家族・地域支援学科 教授
森山 千賀子



本には、文庫本、単行本、新書、雑誌、絵本など、沢山の種類があります。なかでも文庫本は、一般にはA6判サイズが多く、廉価でコンパクトで持ち運びがしやすいため、中学生の頃から愛用してきた本の一つです。

文庫という言葉は、書庫を意味する和語「ふみくら」に漢字の文と庫をあてたことに由来するそうです。『広辞苑』（第7版）には、「書籍・古文書などを入れる蔵、書庫。一般に、図書館が公衆の閲読を目的とするのに対して、書籍の蒐集を目的とするもの」と記されています。また、明治期には、まとまった蔵書、コレクションとして企画された叢書や全集の総タイトルを〇〇文庫と呼んでいました。現在では、所蔵し公開する図書館も文庫と呼ばれ、身近な場所で本に出合える「学級文庫」や「子ども文庫」などの文庫活動もあります。

小型本としての文庫本の普及は元号では昭和期に入ってからで、1927年に岩波文庫、ついで新潮文庫等ができ、文庫本ブームが起こります。第二次世界大戦後には、角川文庫、現代教養文庫等が創刊しブームが起こりますが、多くの文庫は数年で衰退します。ついで、1970年代には、講談社文庫、中公文庫、集英社文庫などが発刊され、再びブームが起こります。その後も何度かの再ブームを起こしながら、現代では沢山の出版社から文庫本が発刊されています。

さて、なぜ文庫本にお値打ち感があるのかというと、文庫本より少しサイズの大きい新書は、学術的なことを平易に書いた教養書や実用書、社会問題に関する作品が中心です。それに対し、文庫本には小説本が多く、自由な作風で人間や社会の様相が描かれています。したがって、作品の中の登場人物を、自分や身近な人と重ねて読むことができます。また、古典や売れ行きの良い単行本の普及版・廉価版であるため、息の長い良本が多くあります。さらに、巻末には著者のあとがきや著名人の解説が掲載され、書き下ろしの単行本には

<森山先生おすすめ図書>

- 『のんのんばあとオレ』
水木しげる著、筑摩書房、1990年（ちくま文庫）
- 『夏の庭』
湯本香樹実著、新潮社、1994年（新潮文庫）
- 『老人と海』
ヘミングウェイ著、福田恆存訳、新潮社、2003年（新潮文庫）
- 『僕とおばあさんとイリコとイラリオン』
ノダル・ドゥンバゼ著 児島康宏訳・解説、未知谷、2004年
- 『博士の愛した数式』
小川洋子著、新潮社、2005年（新潮文庫）

※図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。

記されていない筆者の思いや第三者の解釈などを知る面白さがあります。

例えば、湯本香樹実の作品『西日の町』（文春文庫）には、精神科医で作家のなだいなだ（2013年他界）の解説が載っています。おまけに湯本の処女小説である『夏の庭』と『ポプラの秋』も含めて解説しており、作者が描く「何の変哲もない人間の中にある生（子ども）から死(老人)への連なりへの描写」を見事に代弁しています。

手に取りやすい文庫本は、よい本に出合える機会だと思います。文庫本コーナーを覗いてみてはいかがでしょうか。



図書館ホームページの「利用状況照会」で借りている本の確認・予約ができます。

研究の道しるべを図書館で

白梅学園大学大学院 子ども学研究科
新研究科長 子ども学部 教授
小林 美由紀



本は、人生の羅針盤のように、その時々、道しるべを心の中に刻んでくれる。心に残った本の履歴を辿ると、自分の人生の軌跡をなぞるような思いにかられるのはそのためだろう。小説などが人によって捉え方が違うのは、どこでその本に出会ったかということとも関わるのでしょう。様々な岐路で出会った本の意味は、その時の自分にしかわからないものかもしれない。

一方、何かを研究しなければならないという時、それでいながら何をどう研究して良いか分からない時、図書館はその思いを受け入れてくれる。今は、文献検索をインターネットで手軽にできるようになったが、ついこの間までは、必要な文献は、図書館で探し出すか、取り寄せてもらうしかなかった。重要な研究論文は、様々な研究者に引用されるものだが、自分の研究に必要な論文は、原著を取り寄せ、実際に目を通さなければならない。何十年か前の時代を変えた論文を手に入れた時は、その研究者とじかに触れ合うことができた気持ちを密かに味わうことができた。かつて、研究のためにスウェーデンのカロリンスカ研究所に留学した時、知り合いもいない、言葉も満足に通じない生活の中で、図書館は私の居場所になった。学生であっても、留学生であっても、誰でも使えるのが万国共通の図書館である。時代を超えた著者と対話することもでき、海外で日本の論文に出会って心の安らぎを覚えることもできた。

これから研究をしようと思っている時に、教員から様々な文献を紹介されるかもしれない。一つの文献を読んで、引用文献をさらに辿って行くと、膨大な量になっていくだろう。

時に、情報の中に埋もれて方向性を見失うこともあるかもしれない。論文を書く時の指南書は様々あるが、「情報生産者になる」(上野千鶴子著)は、研究論文を作成する目的や方法論も含めて、優れた入門書となるだろう。自分が研究したいテーマについては、とことん文献を集めて、そこから進路を見出すことも必要となるだろう。

<小林先生おすすめ図書>

- 『情報生産者になる』
上野千鶴子著、筑摩書房、2018年 (ちくま新書)
- 『動的平衡1~3』
福岡伸一著、木楽舎、2009・20011・2017年
(『新版動的平衡1~2』は小学館新書で刊行)
- 『ホモ・デウス—テクノロジーとサピエンスの未来上・下』
ユヴァル・ノア・ハラリ著、柴田裕之訳、河出書房新社、2018年
- 『21世紀の資本』
トマ・ピケティ著、山形浩生他訳、みすず書房、2014年

同時に、研究テーマとは少し離れた文献を読むことも、様々な角度から研究を考える糸口になる。最近のものとしていくつか紹介すると、生命の不思議に専門家でなくても触れることができるのは、「動的平衡」(福岡伸一著)のシリーズがあり、最近3冊目が発行された。近未来を予測するために話題となっているものでは、「ホモ・デウス」(ユヴァル・ノア・ハラリ著)がある。社会の問題を経済の視点から捉えた「21世紀の資本」(トマ・ピケティ著)は、所得格差に悩む人々に指標を与えてくれた。どれも自分の研究とは直接関係ないと思うかもしれないが、何のために研究を行うのかという根源的な問いに向かい合う時に、ヒントを与えてくれるかもしれない。図書館では、研究の道しるべだけでなく、人生の道標も得られるかもしれない。それこそ、時空を超えて、誰とも繋がることのできるのだと思う。

■ 主なデータベース ■ (一部学外アクセス可)

<日本語論文> CiNii Articles、雑誌記事索引集成データベース、医学中央雑誌、メディカルオンライン、日経 BP 記事検索サービス
<外国語論文> PsycINFO、PsycARTICLES、Academic Search Elite、Child Development & Adolescent Studies
<新聞> 朝日新聞 聞蔵、読売新聞 ヨミダス歴史館、毎日新聞 毎索
<百科事典> ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン

図書館ホームページの「データベース」より、オンラインで利用できます。

子ども学部仲本ゼミナール × 図書館コラボ企画

絵本の世界を共に
—それぞれの感じ方の違いを



仲本ゼミ オススメ絵本紹介コーナー

図書館の地下閲覧席近くで、仲本教授、ゼミ生と大学・短期大学図書館との絵本展示コラボ企画を行っています。季節をテーマにオススメ絵本を定期的に展示替えしています。

写真の12月・1月は「クリスマス・お正月・冬」に関する絵本を学生が一人一冊ずつ選び、書架レイアウト、装飾まで行いました。

3・4・5月は「春」がテーマのオススメ絵本を紹介。

かわいいオススメコメントにも注目してください。今後も定期的にコラボ展示を企画していますので楽しみにしてください。

仲本ゼミでは主に絵本をテーマとした研究や活動を行っています。主な活動としては、絵本を題材にし、学園祭や保育現場でワークショップを開催することです。子どもたちと一緒に絵本を読みあいながら楽しみ、絵本の世界を体験できるような活動を企画しています。絵本の世界を実際に言語や造形、身体、音楽等の表現活動と子どもと共に楽しむ人同士の関わりから広げることが目的として、日々試行錯誤し学びを深めています。

また、仲本ゼミでは、図書館とのコラボ企画として学生が季節の絵本を紹介するコーナーを作らせていただいています。11人の学生が1冊ずつ選び、絵本の紹介、オススメポイントなどのポップも製作しています。同じ「春」という題材であっても、それぞれの絵本の選び方から友情に焦点を当てて選ぶ人、メッセージ性を大事に選ぶ人、季節の空気感を大事に選ぶ人など様々な選び方があること等さまざまな視点があることを学び合いました。11人でそれぞれ違う感じ方があるということを実感し、絵本の奥深さを改めて知ることができました。

以前はゼミの中でだけで絵本を紹介し合う、という活動を行っていましたが、それを図書館利用者の方にも知っていた

だけの活動に発展し、ゼミ生一同とても喜ばしいことであると感じています。図書館に「仲本ゼミ絵本紹介コーナー」としてブースを作っていただき、学内の学生や先生方、外部の方に発信することで、自分たちも改めて幼児期に絵本に触れることの大事さや絵本の持つ意味を学ぶことにも繋がっています。

今後もこのような活動をより発展的に取り組むことで、保育者に必要なスキルを身につけ、理想の保育者に近づくことできるように学び続けていきたいと思っています。



白梅祭での仲本ゼミによる「14ひきのかぼちゃ」の様子

楽しみながら学び合う

通して、絵本の奥深さを知る一

今日の本はどんな世界が広がっているのだろう。夜になるとこのような気持ちが沸き上がり、布団に入りながら母の声で語られる物語を待ちわびる幼少期を過ご

した私。今でも、その幸せな時間を思い出し、心地よく振り返ることがあります。世界の国々の童話や民話を選書して語ってくれた母に、特に何度も繰り返し読んでとお願いしたのは、アイルランド出身の文人オスカー・ワイルドの書いた『幸福な王子』でした。幸福な王子の銅像は、立派な金箔に包まれ、青いサファイヤの目や赤いルビーの付いた短剣を身につけていたことから町中の人にとって憧れの銅像でした。しかし、町の中心に立つ銅像であった幸福な王子の目の前には、多くの貧しい人たちの姿が見え、少しでもその人々のためにならうと自由に飛び回ることのできるツバメに自分の体を覆っているものを分け与えるようにお願いします。人々を助けるために幸福な王子は段々とみすぼらしい姿になり、ツバメは越冬できずに死んでいきます。悲しい結末ではありましたが、一場面ごとに幸福な王子やツバメの言動に心を揺さぶられ、さまざまな感情を言葉や表情であらわす私たち姉弟でした。母が優しいまなざしで私たちを受け止め自らの思いを語りあってくれたことを昨日のように思い出します。

私が小学校三年生の誕生日の時に、父と本屋へ行き、好きな本をプレゼントしてあげるから選んできなさいと言われました。初めて自分で手に取って選んだのが、『さと子の日記』（鈴木聡子著、藤沢友一絵、ひくまの出版、1982）でした。難病と向き合い、懸命に生きる主人公の姿は私の心に衝撃を与えました。その後、父には事あるごとに好きな本を選ばせてもらい、私は『兎の眼』（灰谷健次郎著、理論社、1980）、小さなスプーンおばさん（アルフ・プリュイセン著、大塚勇三訳、ビョールン・ベルイ絵、学研プラス、1966）など多くの本を手にとることができました。こんなことを語ると、よほど教育熱心な親に育てられた子どもと感じられる人もいかもしれませんが、意外にも両親はこの当時に読み与えた本の内容や本と一緒に買いに行ったことをあまり覚えてはいませんでした。ただ、子どもたちと本のことについて楽しみあったことだけは忘れられないと言います。その気持ちを聞いた時、子どもであった私だけでなく、父と母にとっても楽しい時間だったのだなと、嬉しい気持ちになりました。

時を経て、大人になった私は、子どもと大人が絵本を読みあう活動の研究をしています。本を通じて子どもと大人がつながりを持ちながら、共に楽しみあうことは、子どもの想像世界を広げたり、本から知識を得たり、言葉を覚えたりするだけでなく、読みあう人同士が幸せと感じられる時間を過ごすことができるからです。その幸せな時間が子どもの育ちに与える影響とは何か、その影響をよりよくするために子どもの周りにいる大人に必要なことは何なのかを探究し続けています。この研究の一部を保有者の皆さんと共に『絵本から広がる遊びの世界—読みあう絵本』（樋口正春・仲本美央編著、風鳴舎、2017年）で述べています。まだ十分な研究には至りませんが、明らかになったことがいくつかあります。その一つが、絵本を保育者と共に楽しみあう経験を積み重ねた子どもたち

は、想像力が豊かになり、さまざまな遊びを生み出していくということです。絵本や児童文学を楽しみ、遊びへと発展させる子どもたちの姿には、常に目的があり、自分たちが想像した世界を遊びで実現させていこうと生き生きとしています。私はこの子どもの想像する力は、いずれ大人になってさまざまなことを想像し、解決していく生き抜く力になっていくと考えています。だからこそ、この子どもたちの傍らにいる大人が、いかに本の世界の扉へ誘う人になるのが重要であると思うのです。

『長くつ下のピッピ』などを書いた有名な児童文学作家アストリッド・リンダグレンは、次のような言葉を残しています。

「本を手にした子どもはひとり、魂の秘密の空間に、自分だけの絵を描きます。そうした絵は何にも勝るものです。人間にはこのような絵が必要です。子どもたちの想像力が絵を描けなくなる日は、人類が貧しくなる日です。世界で起きたあらゆる偉大なできごとは、初めは誰かの想像の中に生まれました。明日の世界がどんな風になっているのか、その大部分は、今まさに読むことを学んでいる人たちの想像力の大きさにかかっています。だからこそ、子どもたちには本が必要なのです」

本学の学生の皆さんは大学子ども学部または短期大学保育科に入学しています。誰もが子どもに何らかの興味・関心をお持ちのことでしょう。そんな皆さんだからこそ、将来子どもたちの傍らにいる大人として自らが本を好きになり、将来は子どもを本の扉へ誘い、共に楽しみあう人となることを期待しています。

本の扉へ誘う人になる



子ども学部 子ども学科 教授 仲本 美央

<仲本先生おすすめ図書>

- 『幸福な王子—ワイルド童話全集』
オスカー・ワイルド著、西村孝次訳、新潮社、1968年（新潮文庫）
- 『さと子の日記』
鈴木聡子文、藤沢友一絵、ひくまの出版、1982年
- 『兎の眼』灰谷健次郎著、理論社、1980年
- 『小さなスプーンおばさん』
アルフ・プリュイセン著、大塚勇三訳、学研プラス、1966年
- 『絵本から広がる遊びの世界—読みあう絵本』
樋口正春・仲本美央編著、風鳴舎、2017年

図書館と出会い

子ども学部 発達臨床学科
講師
宮田 まり子

図書館に行く、私にとってそれは旅に出るようなものです。図書館は、様々なものに出会える出会いの場であるからです。私の研究室や自宅にも、いろいろな本がありますが、それらは私や私の家族がセレクトした物に過ぎません。しかし図書館の本は、色々な方々によって選ばれており、多様性にあふれています。

私が最初に図書館に出会ったのは、確か小学校1年生の頃でした。当時、私は郊外の新興住宅地に住んでいました。いつものように公園で遊んでいた時、突然近くを走る小型バスが音楽を鳴らし、住宅街を一周して、保育園横の駐車場に停まったのでした。近づいて、じっと見ている私たちの前で、車から一人の運転手が降りてきました。そしてその運転手のおじさんは、手際よく車の色々な扉を開いていきました。私たちは、開いた扉から中をのぞき見ました。小型バスの中は、人が一人歩ける程の通路、その両脇に棚、棚は本でいっぱいでした。ほどなく近隣の大人たちが集まってきて、車の中に入っていきました。好奇心の強かった私は、仲間を代表して、大人の後ろについて車の中に入り、本を手にして列に並びましたが、幼かった私は一人では借りられませんでした。私はおじさんから用紙とカレンダーをもらい帰宅しました。その夜両親から、車は「移動図書館」であり、おじさんは市の図書館司書の方であることを教わりました。その日から私は移動図書館とおじさんを待ちました。そして音楽を鳴らしてやって来たバスを追いかけて、やっと借りられたその時の嬉し



最新おすすめDVDも視聴できます。



<宮田先生おすすめ図書>

- 『遊び—遊ぶ主体の現象学へ』
ジャック・アンリオ著、佐藤信夫訳、白水社、2000年
- 『教育とは何か』
大田堯著、岩波書店、1996年（岩波新書）
- 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史』
苅谷剛彦著、中央公論社、1996年（中公新書）
- 『働きざかりの心理学』
河合隼雄著、新潮社、1995年（新潮文庫）
- 『教育の方法（放送大学叢書011）』
佐藤学著、左右社、2010年
- 『見てみよう！全国のおもしろ学校図書館』
こどもくらぶ編、ミネルヴァ書房、2018年

さを今でも鮮明に覚えています。私は街の本を借りている。借りられるカードを持っている。それにここに書かれている字も読める。一冊の本を通して、近所の大人の仲間に入れた、社会の一員になったような気がしたのでした。しばらくして、住宅地の近くに図書館ができ、移動図書館は無くなりました。

かつて、本が少なく貴重であった時代、図書は鎖でつながれ、図書館は有料の場であったといわれています。その後の印刷術の発明と発展により、今では図書館は誰でも利用可能な場になっています。「移動図書館」は市民に格差なく、みな等しく知と出会い学ぶ機会を保障する、とても重要な役割を担うものでした。

最近私も、インターネットを利用して、キーワード検索から欲しい本だけを取り出して利用することも多くなってきました。しかし、それでも少しでも時間があれば、館内をふらふらと歩きます。背表紙を眺め見て、ちょっと中身をのぞき見て、そこで出会えた新たな知に、世界が広がっていくのを感じます。とても嬉しく、豊かな気持ちになります。そこにあるのは、日ごろ触れない文化、観に行くことが難しい景色、時代的に出会うことができない人々の思想や哲学だったりするのです。図書館に行く、それは色々なものを超越できる旅、とても贅沢な旅だと思っています。

図鑑大国に暮らす幸運

短期大学 保育科
講師
宮崎 佑介



日本は世界一の図鑑大国といっても過言ではない。欧米や開発途上国の本屋を訪ねていけば一目瞭然で、その量と質の差に気付けることだろう。図鑑の特徴は、ただの写真・イラスト集であることに留まらない。作者が注目する観点から体系的に絞られた対象について、その特徴や属性が記述されることによって、情報の深みをもたらされる。人工・自然に関わらず、その対象は森羅万象だ。大型書店・図書館に出向けば、誰でも自分好みの一冊に出会えるに違いない。

幼少期において図鑑と触れ合う機会を多く持てるかどうかは、その後の人生にも大きな影響を与えるかもしれない。自然体験の中で出遭った生物の正体を図鑑でつきとめ、その解説を読み、実体験をともなう知識として吸収していく。生物学者には、図鑑を自分の血肉としてきた方が少なくない。私もその一人だし、むしろこの経験が無い生物学者はあり得ないかもしれない。

図鑑には、世界の断片が記述されている。世界の仔細を捉え、その解像度を高めていく一助となるものだ。図鑑を浴びた多寡が、その人の世界観を上げていけるかどうかを決定づけるのではないと思われるほど、その関わりは重要なものだと思う。

たとえば、同じ時間に同じ場所に立ち、同じ方向で同じ風景を見ていたとしても、その人たちに前提となる知識の質や量の違いによって見えている世界は異なってくる。その風景の大部分を占める木本の樹種がわかるかどうか？過去のその場所の歴史を知っているかどうか？



各教員おすすめ図書は図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。

<宮崎先生おすすめ図書>

■『図鑑大好き!—あなたの散歩を10倍楽しくする図鑑の話』
土屋健著、彩流社、2014年

千葉県立中央博物館では、平成26年度に「図鑑大好き!」という企画展が行われたことがある。この展示解説書は、図鑑のような趣もあり、世界一の図鑑大国である所以に触れることができる。

■『ユリイカ—2018年10月号 特集 図鑑の世界』
青土社、2018年

実際に図鑑の制作に携わる著者・編集者・イラストレーターなどの方々が、自身も図鑑で育ってきた背景やその好意を言葉で紡いでいる。図鑑が好きなたちを繋ぐ一冊といえよう。

ある人には大自然に見える景色が、ある人によっては環境破壊の跡のようには映らない景色もある。もちろん、後者が教養のある人だということになる。

幼少期に自然体験を重ねると、そのうち特に好きな分類群というものが定まってくる。発達が進んでくれば、今度は自分でその観察・採集の記録を残したくなってくる。それがさらに高じると、コミックマーケットや学祭のようなイベントにおいて、図鑑系の同人誌を販売するまでに至ることもある。今はWEBが発達し、SNSにおいて同じ興味・関心を持つ方々と繋がりやすい時代だ。このような媒体を通じ、自分の知識を整理して取りまとめ、冊子の形として発表する活動は決して珍しくない時流なのだ。強く実感されるようになった。そもそも人は図鑑を作りたくなる性質を持っているのだという気さえしてくる。

書物の中でも、図鑑は写真や描画を眺めるだけでも満足できる性質がある。換言すれば、比較的敷居が低い書なのである。自分の一冊といえる図鑑に未だ出会っていないという方には、是非とも大型書店・図書館に足を運んでいただきたい。何気なく書棚を眺めて歩いているだけで、思いがけない出逢いに恵まれることもある。

図書館おすすめスポット

1階が新しくなりました。

1階 図書館スタッフおすすめ本・教科書コーナー / 閲覧机・イスの入れ替え



■ 図書館 1 階の閲覧机、イスを新しく入れ替えしました。

図書館1階にある閲覧机11台と、イス54脚を新しいものに入れ替えました。
 閲覧机については、昨年3月に実施した卒業予定者アンケートで机を入れ替えてほしい要望があり、今回入れ替えました。
 なお、机については学内投票を行い、上位だった2種類を最終的に選択しました。投票にご協力ありがとうございました。
 授業や資格のための勉強にぜひ活用してください。
 今後も館内環境をますます充実させるよう努めていきますので、図書館アンケートを行う際はぜひご意見やご要望をお聞かせください。

■ 図書館スタッフがおすすめする本コーナー

図書館スタッフが、在学生のみなさんにぜひ読んでほしい本を取りそろえています。

小説やルポルタージュ、エッセイなどの現代社会に関するテーマや、日々の勉強に関するものなど、様々なジャンルが並んでいます。

一見、関係ないように思えるタイトルでも実は役に立つこともあります。

図書館1階の閲覧席横にありますので、ぜひ手にとって知識・興味関心を深めてみてください。



■ 小学校教科書、小学校教員養成推薦書コーナー

図書館の1階階段横にコーナーがあります。各小学校で採択している国語・算数・理科・社会・道徳の教科書と、各教科の指導要領が並んでいます。

また、先生方が推薦した小学校教諭になるために読んでおきたい本も隣にあります。

貸出(1週間)もできますので、小学校教諭を目指す方はぜひこのコーナーに足をはこんでください。



●●● 図書(絵本) 貸出ベスト 10 ●●● (2018/1/1 ~ 2018/12/31)

順位	回数	書名
1位	44回	施設で育った子どもたちの語り
2位	40回	どうぞのいす
3位	31回	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること
4位	30回	はらぺこあおむし
5位	29回	家族と暮らせない子どもたち
6位	28回	ぐりとぐら
7位	24回	子どもが語る施設の暮らし2
8位	22回	いいんだよ、そのまま
8位	22回	育ちつづける人達 障害の現実と普通の生活のはざま
10位	21回	施設で育った子どもたちの居場所

2018年も保育・施設実習などに関連する図書や絵本が上位に。惜しくも絵本「どうぞのいす」は4年連続1位にはなりませんでしたが。なお、ベストセラーの絵本だけでなく、新しい絵本も年間400冊ほど受入しています。ぜひ、今人気を集めている絵本作家の作品もご覧ください。

●●● DVD(ビデオ) 閲覧ベスト 10 ●●● (2018/1/1 ~ 2018/12/31)

順位	回数	書名
1位	77回	君の隣をたべたい
2位	67回	シング Sing
3位	64回	美女と野獣
4位	63回	モアナと伝説の海
5位	61回	ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅
6位	52回	ぼくは明日、昨日のきみとデートする
7位	43回	ラ・ラ・ランド
8位	40回	余命1ヶ月の花嫁
9位	26回	保育士になるためのつまずきのある子への保育 (重症心身障害児施設・肢体不自由児施設)
10位	25回	映画 聲の形/グレイテスト・ショーマン

アニメ・邦画・洋画問わず新規購入したタイトルが多くランクインしました。また、視聴覚室のヘッドホンも新しいものに入れ替え、より使いやすい環境になりました。ご利用の場合は、1階利用者PC近くにあるファイルより希望タイトル番号(HPからも検索可)をカウンターに伝え、学生証をお出してください。



花みづき・図書館についてのご意見・ご感想を図書館までお寄せください。E-mail: library@shiraume.ac.jp

図書館のホームページはこちらから <http://libwww.shiraume.ac.jp/>

